

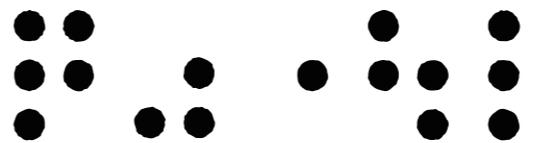
公益財団法人ギャラリー エー クワッド
136-0075
東京都江東区新砂 1-1-1
竹中工務店 東京本店 1F
Tel : 03-6660-6011
Fax : 03-6660-6097

GALLERY A⁴
1-1-1 Shinsuna Koto-ku
Tokyo 136-0075, Japan
Tel : +81-3-6660-6011
Fax : +81-3-6660-6097

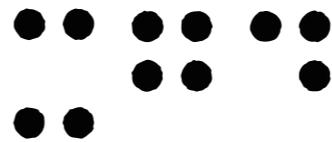
www.a-quad.jp



社会のダイバーシティを考える



て ん じ に



ふ れ る



点字にふれる

6つの点から
広がる世界

「つながる」社会を考える

岡部 三知代 ギャラリー エー クワッド館長 / 主任学芸員

情報社会の発展は、時間や場所、個々の環境を超えて、情報共有を可能にしている。その中で私たちは、実像が見えていなくても、人との「つながり」を実感できているのではないだろうか。

一方で、一人一人は、見えないうちに繋がっており、誰か一人の「利」のために行動することが、全く知らないところで、他の誰かを傷つけたり、何かを奪ってしまっている現実があることにも気づいている。

これからの社会に於いて、個々がバラバラになるのではなく「つながり」を実感しながら理解を深め、幸福感を分かち合うためには、どうしたら良いのか…。

本展では、「社会のダイバーシティを考える」企画の第二弾として、視覚障害を支える「点字」をテーマに、その「触覚」の世界をたどりたいと思う。

当然のことだが、視覚に障害があるなしに関わらず、一人一人が見て、感じていることには違いがある。そのことを敢えて確かめ合うことで、今よりもっと広くて奥深い「つながり」を得ることが出来るのではないだろうか…。

企画に際し、美術家の光島貴之さん、美術鑑賞者で写真家の白鳥建二さん、そして、子どもに絵本を読み聞かせたい!という想いを原動力に、無料で視覚障害の子どもたちへてんやぐ絵本を届ける活動を続けている岩田美津子さんに取材にに応じていただいた。3人はいずれも全盲者として、生き生きと暮らし、社会と繋がっている。取材が進むにつれ、すぐにも彼らの傍らには、心が通じ合う友人や仕事仲間がいることに気づいた。

光島さんには、アトリエの仲間が、白鳥さんにも仕事を支える友人がいて、岩田さんも「ふれあい文庫」のメンバーと活動している。彼らは皆、それぞれ同じフィールドに立って目的を共有し、そのこと自体を楽しむ「つながり」を形成している。

利他研究で発信を続ける伊藤亜紗さんは、植物が二酸化炭素を吸収し、やがて枯れて土壌の養分になる生の循環を、無意識のうちに誰かの役に立っている「利他」のイメージに例える。また、批評家の若松英輔さんは、「利他」の本質とは自分と他者が深く「つながる」ことだと言う。

なお、盲ろう者として初めて大学の教員となった福島智さんは、自分と他者を「つなぐもの」、それが指點字であり、他者と「つながり」を持つことにより暗闇が光となり、生きる喜びを感じる事が出来た、と語っている。

私たちは、この地上で支え合いながら生きる者であり、誰かの役に立ち「つながり」を得られれば、素直に嬉しいと感じる。人との「つながり」は、私たちに幸福感をもたらせ、「生きる」実感をも与える。

点字を起点に「触れる」世界をたどると、五感を越えた先に、深い共感の世界があるように思う。本展が、夫々の感覚を拓くきっかけとなり、利己主義に陥らず、他者と共に生きるために、奥深い「つながり」を得る機会になればと思う。

本展では社会福祉法人日本点字図書館に取材・監修を通じて特別にご協力をいただきました。ほか多くの方々にご協力をいただき展覧会が成り立ちました。この場を借りて御礼申し上げます。

Considerations for a “Connected” society

Director / Senior Curator of Gallery A⁴ Michiyo Okabe

The development of the information society has made it possible to share information broadly, transcending the boundaries of time, place, and personal environments. We seem to feel a “connection” to others, regardless of whether we can see them or not.

At the same time, we have also come to realize that we are living in a world where we have become invisibly connected, and that, completely unbeknownst to us, our actions may end up harming someone somewhere else as a result.

As a society, what do we need to do in order to feel “connected”, to experience a deeper understanding of each other, as well as to feel a shared sense of happiness, rather than become alienated from one another?

In this exhibition, the second part of our “Toward Social Diversity” project, we traced the “tactile” world of Braille, which supports the visually impaired, in order to “feel” their world for ourselves.

Needless to say, each person sees and feels things differently, regardless of whether or not they are visually impaired, but by confirming this obvious fact together, we might be able to gain a broader and deeper “connection” than we presently have.

For this project, we enlisted the participation of Takayuki Mitsushima, an artist; Kenji Shiratori, an art enthusiast and photographer; and Mitsuko Iwata, all three of whom are totally blind.

Iwata san, blind herself, yet strongly wishing to read picture books to her own child, then became motivated to create “Braille” picture books so she could “read” to her child. This led to a desire to read picture books to all kinds of children. She continues to provide Braille translations of picture books free of charge.

In the course of our research for this project, I soon realized that they are all surrounded by close friends and colleagues.

Mitsushima, who has his own art studio staff; Shiratori, who has friends supporting him in his work; and Iwata, who works with members of the “Braille Picture Book Library” team, all share the same objective and enjoy the “connections” they have formed through their various experiences.

Asa Ito, who studies altruism, likens the cycle of life, in which plants absorb carbon dioxide and eventually die to become nutrients for the soil, to “altruism”, whereby our actions unconsciously benefit others. And separately, the critic Eisuke Wakamatsu, believes that the essence of altruism is a deep connection between oneself and others.

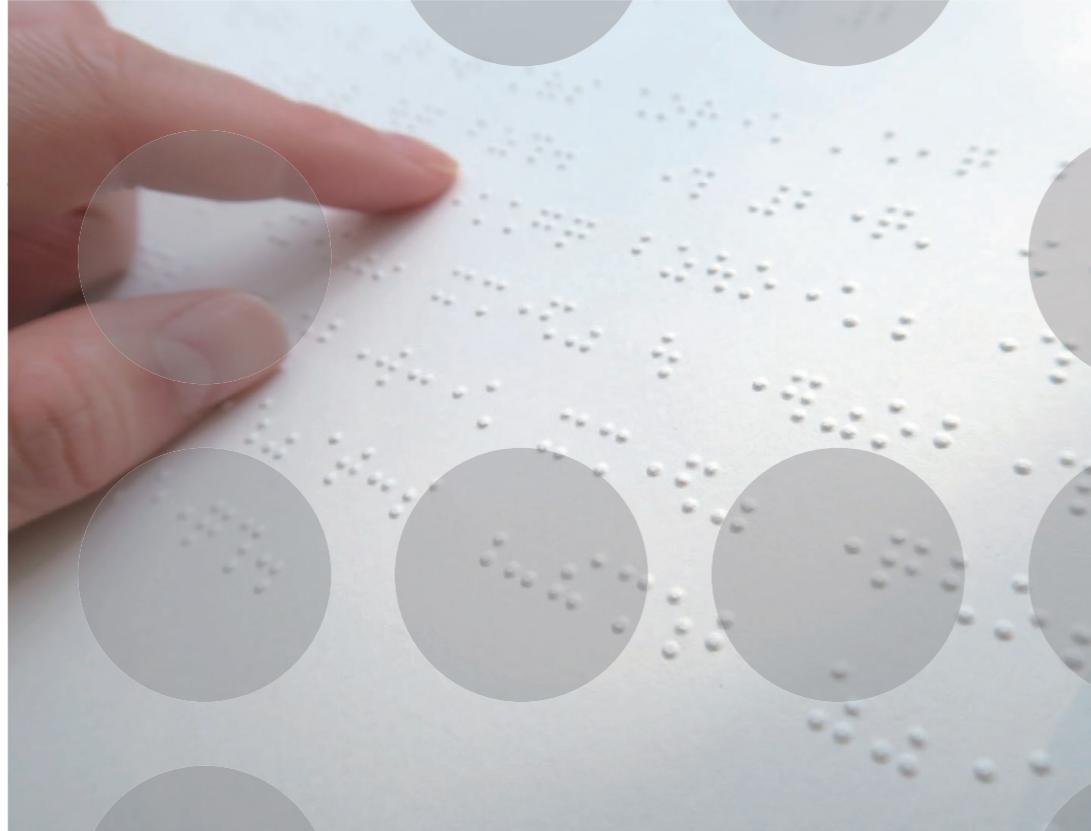
Satoshi Fukushima, the first blind & deaf person to teach at a university, says that finger Braille (a special kind of Braille, yet is quite different to “regular” Braille), is what “connects” him and others. Having this “connection” with others brings light to the darkness and brings him a sense of joy in life. allows him to feel the joy of life.

We are social animals who support and sustain each other on the earth, and derive simple pleasure from helping others. This connection with others brings us happiness and gives a sense of purpose for living. When we delve into the world of “touch”, we find a whole new world, which can seem to surpass our “ordinary” five senses.

When we delve into the world of “touch”, we seem to find a world of deep communion beyond the five senses.

It is my hope that this exhibition will serve as an opportunity to stimulate your senses and deepen your connections, so that we may live together in co-operation, without falling victim to simple selfishness.

I would like to thank the Japan Braille Library for their special cooperation in the research for and supervision of this exhibition. Many others have also contributed to making this exhibition possible, and I would like to take this opportunity to thank them.



1

見える・見えない？ 見え方は十人十色

日本には視覚障害者として障害者手帳を持つ人が約 27 万人、つまり 1,000 人に 2 人ほどいます。その中には、全く見えない人（全盲）だけでなく、見えにくい人（ロービジョン）もたくさんいます。一人ひとりにちがう見え方があり、暮らしを支える工夫もさまざま。

この展覧会では、見えない人・見えにくい人のための文字である「点字」を出発点に、社会の色々な「見え方」をご紹介します。

1

視覚障害=見えない？

視覚障害とは、目が見えない・見えにくいのために、日常生活に支障が生じている状態のことです。

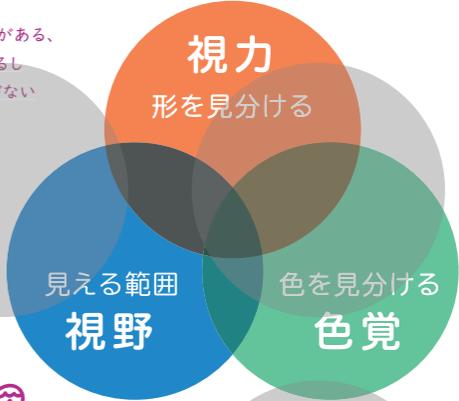
- ・ 全く見えず、光を感じない（全盲）^{ぜんもう}
- ・ 見えにくく、眼鏡などを使っても視力が十分でない（ロービジョン）

の二つに大きく分かれます。ロービジョンでも「暗いと見えにくい」「明るいが見えない」「見える範囲が狭い」など、さまざまな違いがあります。視覚障害=見えない、というわけではなく、色々な見え方のグラデーションがあります。



もともと見えていた時期がある、「中途」視覚障害者もいるし見えていた経験・記憶がない「先天性」の人もあります

周囲の明るさなどの状況、その日の天候や体調でも変化することがあります



白杖を使う人の中には、全盲だけでなくロービジョンもいます



視覚障害のない人を「晴眼者（せいがんしゃ）」と呼ぶことがあります



全盲は、視力を使えない状態です。視力が使えるロービジョンでも、視野や色覚、その他の要素の状態により、どのように見えているかは人それぞれ。

参考：『点字を必要とする人びと』日本点字普及協会、国土社、2019
『目の不自由な人をよく知る本』障害のある人とともに生きる本 編集委員会 編、合同出版、2021
視覚障害リハビリテーション協会 HP 『見えない』『見えにくい』とは？』 https://www.jarvi.org/about_visually_impaired/

2 ::

暮らしを支えるもの

日常におこる不便や不安を解消できれば、目が見えない、見えにくくても「障害」ではなくなるのではないでしょう。

近年では、PC・スマホの読み上げ機能など、視覚障害者の暮らしを支える道具の選択肢が増えていきます。また技術だけでなく、人とのコミュニケーションで可能になることもあれば、法や制度などより大きな枠組みのサポートもあります。

視覚障害と点字

実は、視覚障害者の中でも点字を使う人は1~2割ほどといわれています。ロービジョンで、視力を補って生活できる場合、耳からの情報でまかなえる場合など、点字を習得していない・使わない人も多くいます。高齢の失明では、点字の習得自体が大変になることもあります。しかし点字は、自分のペースで読み書きができる文字です。また目と耳ともに不自由な盲ろう者でも使うことができます。利用する人にとって、点字は世界とつながるためのかけがえのない道しるべになります。

暮らしを支える道具やサービスの一例

でかける

人による介助や同行援護 (ガイドヘルパー)



盲導犬

ユーザーの指示する方向に従いながら、角や段差、障害物を教える。ハーネスが目印。

白杖

触覚を通じ、路面の状態や障害物などの情報を得るための杖。視覚障害を持つことを周囲に知らせる役割も。



移動支援アプリ

道案内や方位の確認、歩行者信号の色などを伝えるなど。

リモート視覚補助サービス

スマホのカメラを通して、現在地確認や道案内など補助するサービス。

☞ まちのバリアフリーについては4章へ

近所の顔なじみや、お店や施設のスタッフなど、人とのコミュニケーションも大事な要素。



一方、スマホなど技術の発展によって、一人でできることの幅も増えています。リモートで手助けする方法も。

くらす

音声ガイド付き家電
電子レンジ、炊飯器など



音声式機器

体温計など

点字つきパッケージ

ジャムなどのビン、ビール缶など

ユニバーサルデザインパッケージ

シャンプーボトルの側面の凹凸など

ユニバーサルデザイン・共用品

障害のあるなしに関わらず使いやすいデザイン。読み上げ機能があらかじめついているスマホなども共用品の一つ。

スマートスピーカー

音声で天気や検索結果などの情報を得たり、声で家電の操作などができる。

ラジオ・PodCast



テレビの音声解説

番組によっては副音声の音声解説などがある

映画の音声ガイド

状況などの解説が加わる。イヤホンで聞けるアプリもある

コンサートなどの点字パンフレット

音楽や落語などの録音物

ブラインドサッカーなどのスポーツ

晴眼者と共に参加できるスポーツも

たのしむ

かく

PC
キーボード入力など



PC・スマホ

音声入力など



点字

手で一点一点打つ点字器のほか、「点字タイプライター」や、点字ディスプレイに入力機能がついた「点字情報端末」もある

レコーダーのボイスメモ



音声通話

PC・スマホのメール / SNS

拡大や読み上げ機能を利用



点字の印刷物や手紙

つながる

点字を使う人は視覚障害者の中で1~2割ほどといわれています。



ロービジョンで、読み上げなどでまかなえるため、点字を使わない人も多くいます。



長い文を読むのは難しくても、短い言葉や数字などの点字が読めると色々な場面で便利です。

よむ

PC・スマホ
拡大表示や画面調整のほか読み上げ機能が使える



デイジー (DAISY)

デジタル図書の規格で、見出しやしおり機能などがあり、ページ移動ができる。音声デイジー (朗読)、テキストデイジー (拡大表示や、読み上げ機能で再生する) などのいくつか種類がある。

点字

紙などに印刷したもののほか、文字データを点字の凹凸に変換して表示する「点字ディスプレイ」などの機器もある

人にきく

図書館の対面朗読サービスなどもある



視覚の代わりに、音や触覚 (手ざわりや振動など) から情報を得たり、色々な方法がありますね。

みる

眼鏡
ロービジョンの状態に合わせ特別に調節したものや、遮光眼鏡など



ロービジョンでは、文字の大きさや配色などの表示を調整することで見やすくなる場合があります。

ルーペ・単眼鏡・双眼鏡



拡大読書器

文字を拡大したり、配色やコントラストを調整することで、ロービジョンの状態に合わせて見やすくなる。読書以外にも使える。

スマホ

カメラを拡大鏡のように使うなど



スマートグラス

ゴーグルのように装着できる情報端末。ロービジョンの状態に合わせてカメラの映像を調整し、見やすくなるものがある。



画像認識機器・アプリ

カメラで映した色や物の名前などを音声で教える、お札を認識する、など。同様に、カメラで認識したものの情報や文字を音声で伝えるスマートグラスなどもある。



2

点字にさわる暮らしの中の点字

駅の階段の手すりや、ビールの缶の飲み口など、色々な所に点字があります。何と書いてあるのでしょうか？ 点字は、ルールを覚えれば読むことができます。指先で触れてすらすらと「読む」にはかなりの練習が必要ですが、まずは基本の「さわり」を紹介します。

点字のことが少しわかったら、冷蔵庫の中や駅までの道のりなど、身のまわりの点字を読んでみてください。

1

点字とは

点字は、タテ3点、ヨコ2点の6つの点でできた文字です。1829年、フランスで盲学校の生徒だったルイ・ブライユが発案したものが、現在の点字のもとになっています。そのさらにもとをたどると、暗闇で暗号を伝えるための、点と線でできた軍用文字でした。

日本では明治時代に、五十音に点字を当てはめたものが作られました。点字が普及する前は、五十音を浮彫りにした焼き物「かわら文字」や、ひもに通したガラス玉と結び目で五十音をあらわす文字「通心玉」などが考えられていました。

現在は日本語点字、英語点字、中国語点字、アラビア語点字など、それぞれの言語の文字や文法に対応した点字があり、世界中で使われています。

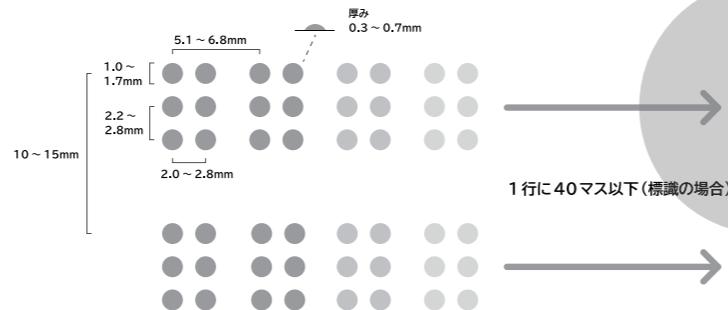
点字の基本

● 6つの点でできている

- 6つの点のまとまりを「1マス」と数え、かな1字に該当します(濁音などを除く)。
- 6つの点の組み合わせは63通り。日本語点字では、五十音や記号をこれらに当てはめています。

● 必ず横書き、左から右へ読む

点字に縦書きはありません。また文字列を見失うことがないように、一般的な点字図書なら1行に32マス、表示板などは40マスまで決められています。



2

点字の読み方

点字の読み方

● 母音と子音でできている

点字の6つの点は、左上から1の点、2の点...と数えます。①②④が母音、③⑤⑥は子音をあらわし、その組み合わせで文字が作られます。

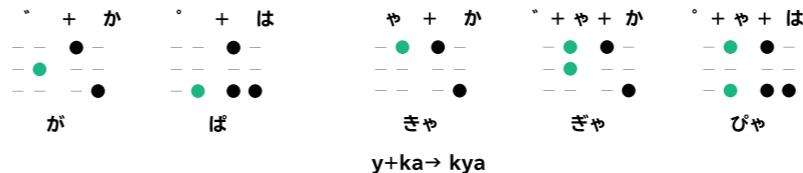


● や行とわ行は特別ルール



● 「ㇿ」や「ㇾ」は前につける

五十音以外に2マスであらわす文字があります。墨字の「が」は「か」の後に濁点「ㇿ」が続きますが、点字を読むときは、先に濁点が指に触れるようになっています。



母音

あいうえお



子音

かさたなはまら行

点字の五十音 凸面 (読む方)

母音	あ	い	う	え	お
子音					
か行	●	●	●●	●●	●●
さ行	●	●	●●	●●	●●
た行	●	●	●●	●●	●●
な行	●	●	●●	●●	●●
は行	●●	●●	●●	●●	●●
ま行	●●	●●	●●	●●	●●
や行	●	●	●●	●●	●●
ら行	●	●	●●	●●	●●
わ行	●●	●●	●●	●●	●●

3

点字の書き方

●書くときは右から左へ、鏡文字

点字を書くときは紙の裏から打つので、読むときと逆方向に、鏡文字で書きます。読むときを凸面、書くときを凹面と呼びます。

●「分かち書き」で読みやすく

点字はすべてかなで表現するため、区切りが重要。言葉のまとまりごとにマスを開け、読み間違えを防いで文を分かりやすくします。

点字タイプライターや「ブレイルセンス」などの点字情報端末も、6つの点に対応するキーを使い入力します。近年は墨字から点字に自動変換できるソフトもできています。

●「東京都」は「とーきよーと」

点字では、原則発音どおりに書きます。「う」と書いて伸ばす音や、文章中（助詞）の「は」「へ」に気をつけましょう。

“今日はどこへ行こう？”

凸面 読むときは左から右へ →

きよー わ ど こ え い こー？

紙の裏から打つので、書くときは右から左へ 鏡文字になる 凹面 ←

？ー こーい さーこーさー けーみち

きよー わ ど こ え い こー？

1マスあげる 1マスあげる 「。」や「?」「!」のあとは2マスあげる

「今日は(ネ)どこへ(ネ)行こう(ネ)」と、間に「ネ」や「サ」を入れられる位置で区切るのが目安です。

“東京都” とーきよーと

「う」と書いて伸ばす音は「ー(長音符)」と書く



「大阪」は「おおさか」
「九州」は「きゅうしゅう」

“私は” わたしわ

「は」「へ」は発音通りに「わ」「え」と書く ※「を」はそのまま

“公園へ” こーえんえ

“散歩を” さんぽを

“しにいく。” しにいく。



会場写真

3

点字をつくる 日本点字図書館の仕事

点字はふれる文字として言葉と向き合える時間をつくってきました。人や機器の手を借りず、自分のペースで読み、自分の言葉を書いて記録したり、人に伝えることのできる、かけがえない文字です。

「日本点字図書館」は、そんな点字文化の発信地のひとつです。点字や音声による図書をつくり、届けるだけでなく、視覚障害者の暮らしを支えるさまざまな活動を行っています。また附属施設の「ふれる博物館」では、博物資料やアートに触れることを通して、様々な鑑賞の仕方に気づきます。

所在地：東京都新宿区高田馬場1-23-4
 設立：1940年
 対象：視覚に障害のある人、活字を読むことが困難な人（利用登録制）
 利用登録者数（2023年度）：12,876名（うち点字使用者 6,311名） / 592団体
 蔵書数（2023年度）：
 ・点字図書（データ含む）計 23,506タイトル
 年間貸出数 計 5,239タイトル
 ・録音図書（データ含む）計 26,567タイトル
 年間貸出数 計 232,504タイトル
 HP：https://www.nittento.or.jp/



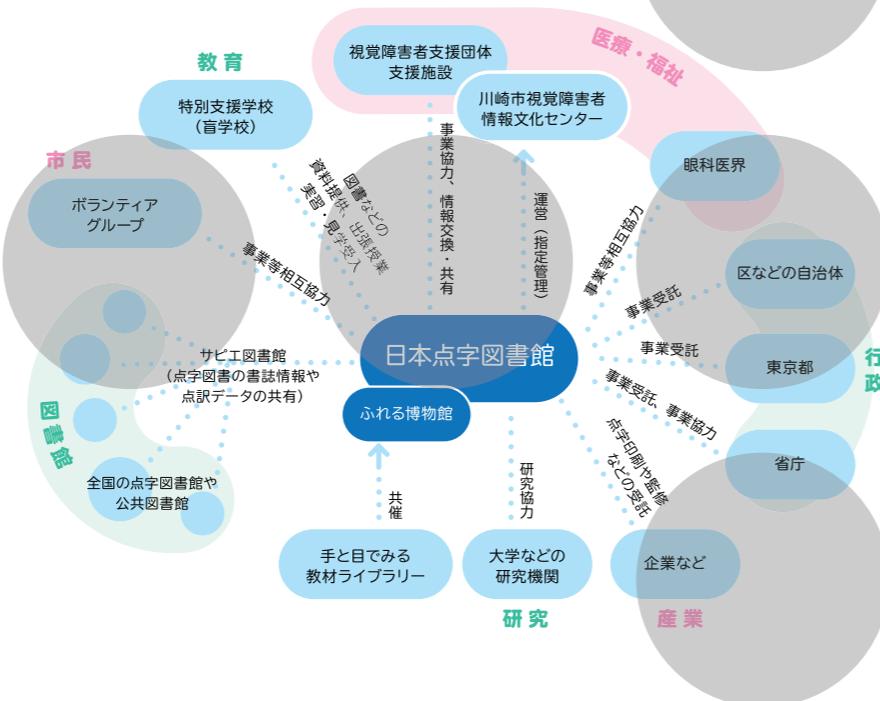
1

日本点字図書館とは

日本点字図書館は、年間約 20万タイトルの点字図書・録音図書を視覚障害者へ届ける、日本最大の点字図書館です。

幼くして失明した本間一夫が1940年にはじめた民間団体で、今では点字図書・録音図書の製作や貸出、配信サービス、生活用具の販売、自立支援などさまざまな活動を通し、点字の文化と視覚障害者の生活を支えています。

日本点字図書館のつながり



日本点字図書館の主なはたらき

知と情報のセンター

貸出・配信

図書等の貸出

- ・登録制
- ・視覚障害者へは無料で郵送を行う



配信サービス

- ・視覚障害者が利用できる電子図書館「サビエ」の管理
- ・点字図書・デジタル図書「デージー」の配信

知りたいに答える

レファレンス

- ・読みたい本についての相談や、全国の視覚障害者関連施設や団体へつなぐことも

希望点訳・個人朗読（プライベートサービス）

- ・一般には点訳・録音されにくい本のリクエストに応じる（例えば大学の過去問集など）

専門対面リーディング

- ・その分野に詳しいボランティアが専門書などを朗読



視覚障害関連活字資料室（奥村文庫）

- ・視覚障害に関連する活字資料を収集
- ・閲覧、複写、レファレンスが利用できる

日本点字図書館付属 池田輝子記念

ふれる博物館



- ・さわって鑑賞できる展覧会を開催
- ・日時予約制 ・スタッフが1組ごとに案内する

図書をつくる

点字図書

- ・点字図書の製作・出版
- ・点訳ボランティアが活躍。館内で印刷・製本も行う。



各種点字印刷物の製作

録音図書

録音図書の製作

- ・朗読ボランティアが活躍。自宅や館内のスタジオで収録を行う。
- ・貸出数は点字図書の40倍近い。



録音雑誌の発行

デージー図書

デージー図書の製作

- ・専用の再生機器やPCソフトで再生できるデジタル図書の国際規格
- ・朗読された「音声デージー（録音図書）」の他、自動読み上げ機能で再生できる「テキストデージー」もニーズが増えている



地域の支援と結び、視覚に関わる困りごとの相談窓口や、イベントの募集など、当事者をとりまくネットワークの結び目にもなっています。



点訳や朗読は、その多くをボランティアが担っています。現在 200 名ほどが活動しています。

暮らしを支える

自立支援

視覚障害者のためのIT教室

- ・生活に必要なITスキルを習得
- ・近年はスマホのニーズが最も高い



中途視覚障害者のための点字教室

自立訓練（生活訓練）

- ・白杖を使った歩行から、調理や掃除、洗濯、メイクなどの生活動作の講習



訓練を通して「一人で点字投票に行けた」「趣味のアマチュア無線がまたできた」などの受講者の声があります。

生活の道具

視覚障害者用具の販売 点字図書の販売



ユニバーサルデザイン

触知案内図・点字サインの製作・監修 製品などの使いやすさのモニター・調査

製品の点字パッケージやサインの監修などを通じて、実は身の回りの点字にも関わっています。



© 日本点字図書館

2 ∴

点字図書をつくる

日本点字図書館で点字図書ができるまでを見てみましょう。

点字図書づくりは点訳ボランティアをはじめ、多くの人の細やかな努力が支えています。現在は全国で作られた点訳データがネット上で共有され、各地で活用されています。

施設ごとにつくりかたは異なり、これは日本点字図書館での一例です。



点字図書は全国で作られているので、重複しない本を選びます。人気小説家の新刊は早い者勝ちだとか。

1. 本を選ぶ



今回はこちらに決定

新川航立『倒産続きの彼女』(宝島社)

日本点字図書館では、新たに加える蔵書を、毎月1回の「蔵書選定会議」で決定しています。毎回、利用者からのリクエストを含む約60タイトルの候補から点字図書・録音図書にする本をそれぞれ数10タイトルずつ選んでいます。

2. 点訳ボランティアへ依頼

ボランティアに原本と点訳の方針を送り、点訳を依頼します。

3. 点訳作業 (ボランティア)

昔は1点1点、紙に直接打っていましたが、今はパソコン点訳です。といっても自動変換ではなく、キーボードの6つのキーを点字の6点に当てはめ、点字の形どおりに入力していきます。

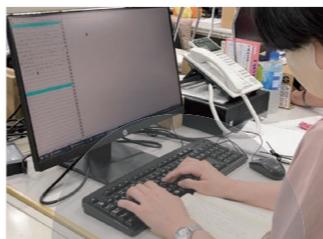
〇〇町は「ちょう」「まち」…？
登場人物の名前の読み方は…？

文中の表をどう点字で表現するか？ など、職員とボランティアで相談して決めていきます。

点訳には、漢字の正しい読み方を調べることが必須。ネット検索や国語辞典、「人名」「地名」「動植物」など、本の内容に応じて専門の辞典類を活用します。

入力後は何度も読み直し、間違いがないか入念にチェック。自動読み上げ機能を使った最終確認は欠かせません。

点字をどこで区切るか、判断のために古語辞典をひくことも。「点訳の手引き」なども参考に。



4. 校正その1



ボランティアから送られてきた点訳データを日本点字図書館の点字プリンタで紙に打ち出し、原本との読み合わせ校正を行います。

点字の表記や漢字の読み方、レイアウト処理などが適切かどうかチェックし、訂正すべき事項があれば校正表に書き出していきます。

指で点字を読む触読者(視覚障害のある職員)が点字を読み上げ(奥)、原本と合っているか確認(手前)します。

5. 修正

校正表にもとづいて、点訳データを修正していきます。文字の増減によって、レイアウトが乱れることがあるので、全体にわたる注意が必要です。

6. 校正その2



PCでメモする場合は、キーボードで点字を入力。「点字ディスプレイ」に表示された凹凸を指で読みます。

修正した点訳データを再度紙に打ち出し、最初とは別の触読者が素読み校正(一人で点字を通読)します。このとき、触読者は校正事項を紙やPCでメモしていきます。その後ふたたび修正作業を行います。

点訳データがあれば遠隔地でも印刷できるので、「サビエ図書館」が役立ちます。



点字図書『倒産続きの彼女』は、全部で5巻になりました！

7. 印刷・製本



文中にあった表は、上下に点線を引いて、本文と区別しました。

完成した点訳データを、紙の両面に打ち出します。天地がつながった連続用紙に印刷し、専用カッターで1枚ずつ切り離します。切り離れた用紙は専用のバインダーで製本し、菜ヒモも付けます。郵送での貸し出しに耐えられる丈夫なバインダーを使用しています。

9. 完成



バインダーで閉じられるページ数には限りがあるので、点字図書はほとんどの場合、複数巻に分冊されます。バインダーの背には、書名・著者名・巻数・分類番号等を記したラベルを貼り、表紙に点字のラベルも貼ります。

10. 配架



点訳開始より半年から一年。書庫に収められた点字図書は、ようやく新たな蔵書となりました。あとは貸し出されるのを待つのみ！リクエストを受けると、無料で郵送されて利用者に届けられます。

点字で広がる社会

立花 明彦 日本点字図書館長

今日、私たちの日常には点字が記された多くのものがあります。

駅では券売機や運賃表、改札とホームを結ぶ階段の手すりにある点字を見ることができます。電車に乗っても、車内のドア部分に貼られている号車・ドア番号を示した点字を見るはず。新幹線にも、デッキの手すりやトイレ内に点字が。

自宅でも、家電製品や普段何気なく手にしているものに点字が付されています。洗濯機の操作ボタン、電気ポットや食器洗い乾燥機、洗浄便座。冷蔵庫を開けて缶ビールや缶酎ハイがあれば、ブルタブの部分に点字が書かれていることに気づくでしょう。ソースやケチャップの容器、ジャムやドレッシングの瓶にも点字の付いたものがあります。使っている化粧品、メイク落としなども見てください。このように、私たちの周囲には、点字の付いたものが数多くありますが、それを必要としなければなかなか気づかないかもしれません。

点字は、視覚障害のある人のための文字です。その点字が身近なところに記されるようになりました。このことを「点字の市民権の広がり」と呼んでいます。つまりは点字が「墨字」（晴眼者が用いる文字の総称）と同様に、文字として一般にも認められてきたのです。これは、視覚に障害のある人々の存在が社会に認識されるようになったことの証として受け止められます。

点字が考案されたことによって、視覚障害のある人は初めて自らが書いて読むことのできる文字を獲得しました。それによって読書

をし、知識を得て考えをまとめ、発信することができるようになり、真の意味で社会とつながりました。

ただ点字は指先で読み進める文字であるために、だれもが習得できるものではありません。特に人生の途中で視覚障害を負った人の場合、指先の感覚が低下して、習得に時間を要したり、図書を読む段階には至らない場合もありますが、日常にある点字は読み、役立てている人はいます。中途視覚障害の人にとって点字は「未来の扉を開ける鍵」なのです。点字が読める人の数を問うのではなく、それを必要とする人がいることを大切にしたい社会であってほしいと思います。

電車のドア内側に貼られた点字が何者かによって剥がされかけていることがあります。大切なそれをもぎ取ろうとするのは残念でなりません。点字を目にすることがあったら、それを必要とする人がいること、視覚障害のある人のことを思い起こしてくださると嬉しいです。

Society broadened by braille

Director, Japan Braille Library Akehiko Tachibana

Today, many things in our daily lives have braille inscriptions on them.

At stations, you can see braille on ticket machines, fare tables, and on the handrails of the stairs between the ticket gate and the platform. On trains, you can also find braille indicating the car number and door number on the door of the train car. Bullet trains also have braille on the handrails of the deck and inside the restrooms.

In our homes as well, braille is on household appliances and other items that we come in contact with on a daily basis, such as the buttons on washing machines, electric kettles, dishwashers, and toilet seats. Open the refrigerator, and you may notice that there is braille on the pull tab of a can of beer or shochu. Sauce, ketchup, jam and salad dressing jars sometimes have braille on them. Take a look at the makeup remover and other cosmetics products that you use. As you can see, braille is on many things around us, but unless we have a need for it, we tend not to notice.

Braille is a writing system for the visually impaired, and has come to be used in familiar places in our daily lives. The spread of braille is referred to as “the growth of braille’s civil rights”. In other words, braille is now generally acknowledged as a form of writing on the same level as “ink characters” (a generic term for

characters used by people with clear vision).

With the invention of braille, the visually impaired acquired for the first time a written script that they could write and read. This enabled them to read, acquire knowledge, compose and communicate their thoughts, and connect with society in the truest sense of the word.

However, because braille involves reading with the fingertips, it is not something that everyone can master. Especially for those who have suffered from visual impairment in the middle of their lives, it may take time to learn braille because their fingertips are less sensitive, and they may not be at the stage where they can read books, but they may still be able to read and make use of braille in their daily lives. For those who have lost their sight in mid-life, braille is “the key that opens the door to the future”. It is my hope that as a society, rather than focusing on the number of people who can read braille, we place value on the fact that there are people who have a need for it.

Sometimes the braille on the inside of the train door is almost peeled off, as if someone had tried to remove it. It is very sad that there are people who would try to tear away something so important to others. When you see braille, please remember that there are people who need it, people who are visually impaired.

3

ふれる・はなす・みる

これらの写真はすべて、葛飾北斎の代表作〈富嶽三十六景 神奈川沖浪裏〉を、さわって伝えるための資料です。平面を半立体（浮彫）に翻案したレリーフや、描かれている舟の全体像の模型、また波・舟・富士山の位置関係を伝える模型もあります。

一つの絵を「見る」方法はたくさんあります。白鳥建二さんのように、人と話しながら頭の中でイメージして、会話の中で「作品を見る」こともできます。また作品が置いてある美術館などの空間や雰囲気を含めて味わう人もいるでしょう。目だけでなく、手でさわったり、話したり、全身を使って作品を楽しんでみましょう。

手で見る絵

右の白いレリーフは、イタリアのアンテロス美術館が制作した「手で見る絵」シリーズの一つです。手でさわって認識（触察）しやすいよう、実際の版画よりも大きなサイズになっています。波の荒々しさを際立たせる波頭の立体感や、手前側にある大波を高く盛り上げ、奥にある富士山との高低差で奥行きを表現するなど、触覚で作品の質感や構図を伝える工夫がされています。この作品を所蔵する「手と目で見える教材ライブラリー」はアンテロス美術館の東京分館となっています。



たてはらこ
立版古型模型
波と舟、富士山の位置関係を伝えるための補足資料
制作：大内 進
所 蔵：手と目で見える教材ライブラリー



舟模型
描かれている舟がどのような形をしているかを伝える補足資料
制作：大内 進
所蔵：手と目で見える教材ライブラリー

手で見る絵（レリーフ）
制作：アンテロス美術館
協力：大内 進
翻案：パオロ・グラランディ（レリーフ制作）
所蔵：手と目で見える教材ライブラリー

日本点字図書館付属 池田輝子記念 ふれる博物館

日本点字図書館の附属施設「ふれる博物館」は、さわって鑑賞できる博物館です。予約制で、スタッフが一緒ずつ解説し、椅子に座りながらじっくり展示品にさわることができます。歴史や建築、宇宙、生物など、さまざまなテーマの企画展を開催し、「ふれば 目 開く想い」というキャッチコピーの通り、さわりながらものの形や構造を確かめ、解説や対話を通して総合的に理解することができます。また、実寸大の再現など、感覚的に伝えるためのさまざまな工夫がこらされ、晴眼者も視覚障害者もともに楽しめる場所となっています。

所在地 東京都新宿区高田馬場 2-3-14 アイ・ブライツ 2階
開館日 水・金・土曜（年末年始・祝日休館 臨時休館あり）
10時～16時（10時、13時、15時いずれかの予約制）
HP <https://www.nittento.or.jp/about/fureru/index.html>



手と目で見える教材ライブラリー

「手と目で見える教材ライブラリー」は、視覚障害教育に長年携わる大内進さんが収集した、立体模型などの触察用教材のライブラリーです。日本点字図書館と「ふれる博物館」を共催し、資料提供などを行っています。たとえば寺社建築の模型なら、同じ縮尺で異なる数種類を所蔵し「比較して、バリエーションがあると知ることが、理解や楽しみにつながる」と大内さん。たとえば「法隆寺」や「屋根」などのイメージを人と共有できれば、より深いコミュニケーションが生まれる。その基礎を築くものとして、さわる教材を収集しています。

所在地 東京都新宿区西早稲田 3-14-2 早稲田ビル 3階
開館日 完全予約制
連絡先 oouchi.nise@gmail.com（大内進）

作品を見ること、触ること

飯尾由貴子 兵庫県立美術館 館長補佐兼課長

この展覧会は「点字」を起点に、様々な分野で活躍する視覚障害者の方々の仕事や営みを通して彼らがどのように世界をとらえているのかを考える企画であるという。我々はさまざまな感覚を駆使して世界を認識しているが、触覚を通して「みえている」世界とはどのようなものなのか。認識の出発点となる知覚、なかでも視覚と触覚は美術＝造形芸術の知覚にとっても重要な感覚である。本稿では筆者のささやかな経験ではあるが、この「触覚」に焦点をあてた展覧会について紹介させていただきたいと思う。

筆者が勤務する兵庫県立美術館では、「美術の中のかたち 一手でみる造形」という展覧会を開催している。展示物を触って鑑賞することができる展覧会であり、前身の兵庫県立近代美術館時代の1989年以降ほぼ毎年開催され今年で34回目を迎える。

我々学芸員が「かたち展」と呼んでいる本展は、当初より主に二つの目的を掲げている。ひとつは視覚障害者の方に美術鑑賞の機会を持っていただくこと、そしてもうひとつは視覚のみに依存してきた美術鑑賞のあり方を問い直すことである。前者については、点字のキャプションや解説文、点字ブロックを設置するほか、鑑賞者が点字の感想文を書くための点字器を置くなどの対応をしている。事前に手引き研修という美術館スタッフ全員を対象とする講習を行い、視覚障害者の方の案内の仕方を学ぶ機会も設けている。一方がアイマスクを付けて二人一組で行う誘導の研修は、視覚障害者をめぐる日常のさまざまな問題に気づかされる契機ともなっている。^{*1}

後者について。これは美術鑑賞—感覚—経験にまつわる根源的な問いと繋がっている。「かたち展」は毎年担当学芸員が替わる。担当者が本展をどうとらえるか、何を狙うかによって（当然のことだが）展示構成が全く異なり、視覚や聴覚に対する様々なアプローチが試みられている。^{*2}

本展で作品に触れた人は皆一様に触覚と視覚の違いに驚く。目で見ただけではわからなかったテクスチャーが感取され、見る時とは全く異なる作品体験の地平が拓かれる。手で触れることは、「手ごたえの果てしない連鎖」^{*3}を体験することであり、それによって視覚による対象認識とは異なる世界が立ち現れる。「見えている物

を描くのは、地平・遠近法構造を備えた視覚を触覚的肉眼へと切り詰めることである。物の眺めの多様をただちにその物の単一性へと跨ぎ越してしまう日常の視覚とは逆に、無数にあり得る眺めのうちのある特定の眺めにこだわり続けることである。物の単一性の延長線上にあるその物の名をあたかも忘れたかのようにふるまうことである。画家は失語症のふりをして、眼で世界を撫でまわす。」^{*3}という一文を最近目にしたのだが、まさにこの画家が作品創造において行っていることは目で見えるのではなく目で「触る」ことであり、作品に触れることは個々の作家の感覚を鑑賞者が追体験することになるのである。「触れる」ことは唯一無二の体験となりダイナミックな鑑賞体験として記憶に刻まれてゆく。見ることに触れることは美術鑑賞において大きなインパクトを持つ。

コロナ禍により「かたち展」2020年度は中止となった。人と触覚を共有することが難しかったからである。このときほど美術と「触る」こととの距離を痛切に感じたことはない。上記1989年の「フォーム・イン・アート」の報告書は次の言葉で締めくくられている。「この美術体験を通して、私たちの生きている世界を、その本来的な豊かさと深さにおいてとらえ直すことの大切さが、理解されることだろう」^{*4}「かたち展」の趣旨はこの一文に尽きる。「触る」ことを通じてこれからも本展からさまざまな美術体験が生まれることと思う。^{*5}

*1 「手引き研修」は認定NPO法人神戸アイライト協会、キャプション等の点訳は点訳ボランティアグループ（点V連）の協力を得ている。

*2 「美術の中のかたち展」の過去のラインナップは兵庫県立美術館ウェブサイトを参照 chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.artm.pref.hyogo.jp/exhibition/j_2309/pdf-1.pdf

*3 新田博衛「論書」『芸術の理論と歴史』思文閣出版、1990年、pp.6-7

*4 「フォーム・イン・アート 展覧会報告書」1989年12月、兵庫県立近代美術館

*5 本年は「北川太郎一時のかたち展」を開催予定（2024年8/20-12/8）

追記：触覚による鑑賞をテーマにした映画に、オメロ触覚美術館での取り組みを紹介した「手でふれてみる世界」（2022年 岡野兒子監督）がある。昨年の「かたち展」の関連企画として当館でユニバーサル上映会を行った。

Seeing and Touching Art

Chief Curator, Hyogo Prefectural Museum of Art Yukiko Iio

This exhibition takes Braille as a starting point for examining the work and activities of visually impaired people in various fields and considering how they perceive the world. We perceive the world through our various senses, but what sort of world is “seen” through the sense of touch? Of the sensory perceptions that form the basis of cognition, sight and touch are particularly important senses for the perception of fine arts. Based on my own limited experience, I would like to introduce an exhibition that focuses on the sense of touch.

The Hyogo Prefectural Museum of Art, where I work, hosts an exhibition titled “Form in Art: Perceiving with the Hand”. The exhibition, which allows visitors to touch the works on display, has been held almost every year since 1989, when this was still the Museum of Modern Art, Hyogo, and this year marks the 34th time this exhibition will be held.

From the beginning, this exhibition, which we curators call the “Form Exhibition”, has had two main objectives: to provide an opportunity for the visually impaired to appreciate art, and to call into question the way in which art appreciation has been dependent solely on sight. With regard to the first objective, the museum has installed Braille captions, explanatory text, and Braille blocks, as well as a Braille writing device for visitors to write their impressions in Braille. A training course for all museum staff called “guidance training” is held in advance, giving them the opportunity to learn how to guide visually impaired visitors. The guidance training, in which the staff work in pairs, with one person wearing an eye mask, also serves as an opportunity to raise awareness of various everyday issues faced by the visually impaired.¹

The latter objective touches on the fundamental question of how we appreciate, sense, and experience art. The curator in charge of the “Form Exhibition” changes every year, and as one might expect, the composition of the exhibition is completely different depending on how the person in charge conceives of the exhibition and its aims, and a wide variety of visual and auditory approaches have been explored.²

Everyone who is exposed to the works in this exhibition is surprised by the difference between the sense of touch and the sense of sight. Textures that could not be perceived by the eyes are sensed, opening up a completely different dimension for the experience of the work than when it is viewed. To touch something with one’s hands is to experience an “endless chain of tactile feedback”³, resulting in the emergence of a world that is different from the object as it is perceived visually. “To depict what is seen is to reduce vision, with its horizon and perspective structures, to the tactile eye. Contrary to everyday vision, which immediately crosses over from the variety of views of an object to its unity, it remains attached to a particular view among the myriad of possible views. It is to act as if one has forgotten the name of the object, which is an extension of the object’s unity. The painter pretends to be aphasic, to caress the world with their eyes.” These words, which I

came across recently, are a perfect description of how the artist creates their work: rather than looking at the object, they “touch” it with their eyes, and by touching it, we are able to relive the sensations of the individual artist. “Touching” becomes a unique and dynamic experience that is etched in our memory, and has a greater impact on art appreciation than seeing.

The “Form Exhibition” was canceled in 2020 due to the pandemic, when it was difficult to share the sense of touch with others. I have never felt so keenly the distance between art and “touch” as I did at that time. The “Form in Art” report from 1989 concludes with the following words: “This art experience will certainly help us understand the importance of rediscovering the world in which we live, in all its inherent richness and depth.”⁴ The aim of the “Form Exhibition” is summed up in this one statement. It is my hope that through “touch”, this exhibition will continue to give rise to a variety of art experiences in the future.⁵

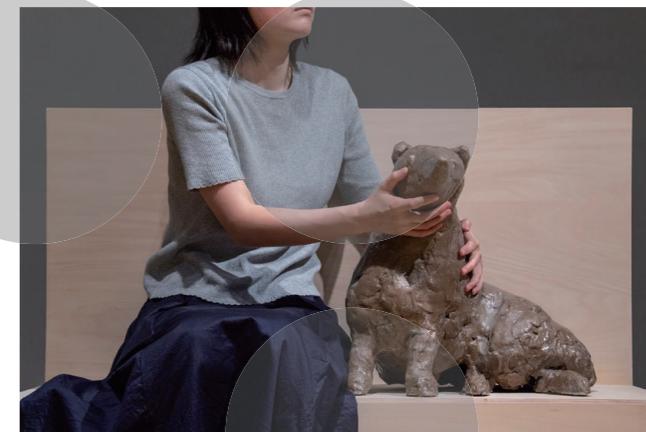
*1 “Guidance Training” was provided by the Kobe Eyelight Association, an authorized NPO, and captions and other notation were translated into Braille with the cooperation of the Braille Translation Volunteer Group (Ten V Ren).

*2 See the Hyogo Prefectural Museum of Art website for a list of past “Form in Art” exhibitions. chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.artm.pref.hyogo.jp/exhibition/j_2309/pdf-1.pdf

*3 Hiroe Nitta. “Ronsho,” Art Theory and History (Shibunkaku Shuppan, 1990), pp. 6-7.

*4 “Form in Art Exhibition Report”, December 1989, Museum of Modern Art, Hyogo.

*5 This year’s exhibition will be “Kitagawa Taro: Form of Time” (Aug. 20 – Dec. 8, 2024)



美術の中のかたち 手で見える造形「触りがいのある犬 中ハシクシグ」展

2018年 兵庫県立美術館 撮影：福永一夫

本展は、中ハシクシグ氏が自分の愛犬を、目で見てではなく、触った感覚で造形した像を触るというものでした。目で見て作るのではなく触った感覚を再現する方向で作られた像はプロポーションや形態が若干歪んだ形となりましたが、触った感覚はまさに本当の犬に触れているようで、視覚と触覚との差異を体感する展示となりました。

見えなくても絵本を読みたい!

岩田美津子の歩み

「おかあちゃん、絵本読んで」息子の願いをきっかけに、先天性の全盲の岩田美津子さんは、見えなくても共に楽しめる絵本のかたちを探求し始めました。周囲の人びとに聞いて探し回り、たどり着いたのは透明なシートに点字を打つ方法でした。市販されている絵本の文を点訳して貼るほか、絵の形に切ったシートを貼り付けたり、説明文を加えるなどの工夫をした「てんやく絵本」をボランティアの協力で作りはじめます。

1984年、大阪の自宅を「岩田文庫」として、全国の視覚障害者のいる家庭へ、てんやく絵本の貸し出しをはじめます。

当時、点字で書かれた文書は郵送無料でしたが、絵が含まれるてんやく絵本の郵送は有料でした。上京のたび郵政省に直談判するなど3年に渡る交渉を続け、1987年に郵送無料化に漕ぎつけました。



岩田美津子(左)てんやく絵本ふれあい文庫にて

てんやく絵本ふれあい文庫

「見えない親や子どもたちにも絵本の楽しさを味わってほしい」という思いから、ボランティアと手作りし続けたてんやく絵本は2000冊を超え、1991年に岩田文庫は「てんやく絵本ふれあい文庫」としてリニューアルしました。

ふれあい文庫では、利用者それぞれの年齢や季節などに合わせて、次に貸し出す絵本を選んで送ります。返却や発送、てんやく絵本づくりなど、さまざまな作業を曜日ごとに集まるボランティアがいない、代表の岩田美津子さんは皆が働きやすい環境づくりを徹底するほか、点訳のクオリティチェックも欠かしません。また在宅の点訳ボランティアや、手作りの郵送袋を作るボランティアも全国で活動しています。

所在地 大阪市西区江戸堀1-25-35 近商ビル2階
活動日 毎週水~土曜
HP <https://bccweb.bai.ne.jp/tenyaku-ehon/index.htm>



てんやく絵本づくり①
点字をシートに打つ



てんやく絵本づくり②
シートを絵本に貼る



てんやく絵本づくり③
絵の形をトレース



てんやく絵本づくり④
シートを切って貼る



完成したてんやく絵本
と手作りの郵送袋



1998年頃の
文庫利用者の家にて

写真提供: てんやく絵本ふれあい文庫

〈てんじつきさわるえほん〉のみみつ

点字つき絵本の出版と普及を考える会

岩田美津子さんの活動のもう一つの広がり、点字つきの絵本やさわって楽しめる絵本の「出版」です。

てんやく絵本づくりのノウハウをもとに、1996年、岩田さんはこぐま社の編集協力を得て国内初の点字つき絵本『チョコチョコキョッキン』を出版しました。

「書店にも図書館にも、さわって楽しめる本が普通にあってほしい」と岩田さんは語ります。2002年、さまざまな出版社や印刷会社、書店や作家などに呼びかけ「点字つきさわる絵本の出版と普及を考える会」が結成されました。会社を超えて協力し、技術や情報を共有しあい、現在では40冊以上の〈てんじつきさわるえほん〉が出版されています。

点字つき絵本の出版と普及を考える会
HP <https://tenji.shogakukan.co.jp/index.html>
絵本リスト <https://tenji.shogakukan.co.jp/list.html>



〈てんじつきさわるえほん〉は、通常の絵本とどうちがう?



カラー印刷したものの上に隆起版を印刷すると、このようになります(田中産業株式会社にて)



隆起印刷した点字や絵がつぶれないように、通常の本とは違う工夫が製本にも必要です。絵本を作るときには、仕上げで、表紙や本全体にかなりの圧力をかけますが、大きな圧力がかからないリング綴じや蛇腹の製本にしたり、合紙製本においても特別な工夫が必要です。これらの製本はコストがかかるため、通常の絵本より価格も高くなっています。

←隆起印刷したものは、平らに重ねると隆起がつぶれてしまうので、製本するまで縦置きにしておきます(大村製本株式会社にて)



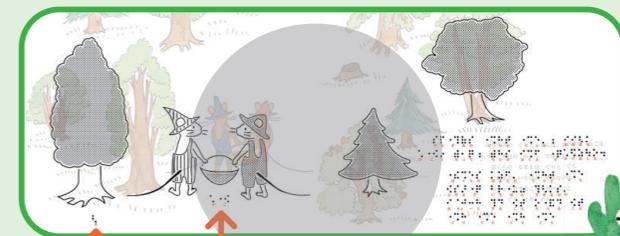
〈てんじつきさわるえほん〉とは?

カラー印刷の上にUVインク(光をあてると固まる特別なインク)で、点字やイラストの形を隆起印刷(立体的に盛り上げる印刷)した絵本です。目の見える子、見えない子、読んであげる目の見える大人、見えない大人、全ての人がいっしょに楽しむことをめざしています。そのために、隆起部分にはさまざまな工夫があります。



隆起図では木の数がへっていたり、後ろ姿の「ぐりとぐら」が横向きに?

絵の通りに細かく隆起図にすると、ごちゃごちゃして、さわったとき、かえって分かりにくくなる場合があります。テストや修正を何度もしながら、数をへらしたり、形を単純にしたりして、絵を整理しているのです。ときどき、絵本の文章とは別に、絵のすぐそばにみじかい点字があります。これはさわるだけでは分からないときのための説明です。



絵本の絵+隆起図

資料提供: 点字つき絵本の出版と普及を考える会

カット ©日比野尚子 / 借成社



4

点字のある所・ない所 まちを歩く

一歩まちに出れば「点字ブロック」が目に入ります。バリアフリー設備は誰にもやさしい環境を目指して考えられたものですが、実際のまちには、点字ブロックや音響サインがある所や、ない所が混じりあっているのが現実です。

美術家の光島貴之さんと、写真家・美術鑑賞家の白鳥建二さんは、ともに全盲です。光島さんはまちを歩いてとらえた感覚を作品にし、白鳥さんは、自分の目には見えない写真をひたすら撮りながらまちを歩きます。彼らは時に、点字ブロックからもはみ出しながら、それぞれの方法で自由に深川のまちを体験しています。二人の歩いた足跡をたどってみましょう。

協力：
東京メトロ
参考：
『まちのバリアフリー さまざまな人をささえる』
渡辺崇史監修、ポプラ社、2019
国土交通省「道路の移動等円滑化に関するガイドライン」
<https://www.mlit.go.jp/road/road/traffic/bf/kijun/pdf/all.pdf>
ホーム転落をなくす会 HP
<https://www.stoptenraku.com/>

駅のバリアフリー

ホームドア

- ・令和4年度の駅ホームからの転落事故計2338件のうち、60件が視覚障害者(国土交通省2022)。平成25年からの10年間で20名近い視覚障害者が死傷しており、転落事故対策は重要な課題。
- ・ホームドアには点字で号車やドア番号などが記され、位置を確認する目印にもなる。

上面と、青い「●両目●番ドア」ラベルに点字表記



赤は高齢者、黄はロービジョン、黒のふちどりは白内障の人が視認しやすい



音サイン

- ・誘導チャイム…改札口では「ピンポン」、ホームの階段では鳥の声などで、場所を知らせる。
- ・自動音声案内…エスカレーターの行き先や、トイレの男女別を知らせる。

段差の識別シール

- ・ロービジョンの人や高齢者などが段差をはっきり確認できるよう、階段の両端に貼られている。

手すりの点字

- ・点字で出口の方向や、〇〇線ホームなどが記されている。

点字運賃表

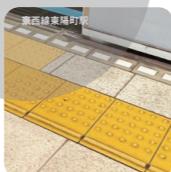
- ・指で探しやすいよう駅名の五十音順になっている。



内方線付き警告ブロック

- ・ホーム側に1本線がついた点字ブロック
- ・線路側とホーム側の区別がつくことで、誤って線路側へ入ることを防ぐ。

線のある側がホーム



ホーム ← → 線路側

音響式信号は、騒音対策のため、早朝や夜は音がでない所が多いんです。車の音で判断したり、他の人に合わせて渡ったりしますが、不安も大きいですね。



困っているなら「何かお手伝いしましょうか?」
危ない時は「止まって!」など、声かけも安全を守ります。

1

まちと駅のバリアフリー



点字で「ボタン」

常に音が鳴り、位置を知らせる



点字で「タッチスイッチ」

青ボタンにさわると青信号の音が鳴る



箱の上を押すと青信号が延長
赤ボタンを押すと青信号の音が鳴る



車道と歩道の段差

- ・車道と歩道の間には段差があり、標準2cmほど歩道が高くなっている。
- ・歩道と車道の境目を知る目印になる。



エスコートゾーン

- ・横断歩道の中央に設置される、白とグレーの点字ブロックのような設備。
- ・横断歩道からはみ出ずに渡るための目印。
- ・車椅子などの通行をスムーズにするため、点字ブロックより突起が小さい。

まちのバリアフリー

音響用押ボタン

- ・青信号の間、「ビヨビヨ」「カッコー」などの音や「とおりゃんせ」などのメロディが鳴る。
- ・横断歩道の手前側で「ビヨ」、向こう側では「ビヨビヨ」など、交互に別の音を鳴らすことで、渡る方向を伝える「異種鳴き交わり方式」が増えている。

青延長用ボタン付き信号機

- ・車椅子マークがついているものは、押すと青信号を延長できる。

新しい信号機

- ・近年、専用アプリを通じて信号の色を音や振動で伝えたり、青延長ができる信号機も徐々に実装されている。

点字ブロック

- ・凹凸を足の裏や白杖で感じとり、歩道の進行方向、分かれ道、交差点の位置などを判断する。
- ・ロービジョンの人にも目印となるので、道路や床に対して見えやすい色が重要。
- ・1965年大分県で発案され、世界各地で導入されている。

新しい点字ブロック

- ・従来より突起が丸くなり、車椅子などの通行を妨げにくくなっている。
- ・QRコードがつき、専用アプリで読み込むと道案内音声が開けるものも開発されている(駅などで実装)。



警告ブロック
注意すべき位置を示す(階段や横断歩道の前、分岐点、案内板の前など)

誘導ブロック
進行方向を示す

QR付き警告ブロック

2 ∴

光島貴之が歩く

光島さんは、白杖の感覚や手ざわり、そしておしゃべりを頼りに、深川・東陽町周辺を歩き、作品をつくりました。どんな音がきこえたのでしょうか？ コーヒーの香り、木洩れ日の光、お寺では、何を感じたのでしょうか。

プロフィール

1954年京都府生まれ。10歳頃に失明。大谷大学文学部哲学科を卒業後、鍼灸院開業。鍼灸を生業としながら、1992年より粘土造形を、1995年より製図用ラインテープとカットティングシートを用いた「さわる絵画」の制作を始める。'98アートパラリンピック長野、大賞・銀賞。他作家とのコラボレーションや、「触覚コラージュ」「釘シリーズ」などの新たな表現手法を探索している。



Photo: 守屋友樹

主な展覧会

- 2019 東京都現代美術館 「MOTサテライト 2019 ひろがる地図」
- 2021 長野県立美術館「アトラボ 2021 第1期 光島貴之展 でこ・ぼこ・ながの」
- 2022 愛媛県美術館 「特別展 みる冒険 ゆらぐ感覚」
- 2024 東京都渋谷公園通りギャラリー 「今村遼佑×光島貴之 感覚をめぐるリサーチ・プロジェクト〈感覚の点P〉展 プレイバント」

街に新しい光を当てる

高内 洋子 アトリエみつしま

光島がびたりと足を止めた。建物から流れてくる軽快なジャズ音楽。ここは門前仲町、ベーグル屋の前。

京都だろうが東京だろうが、「たぶんこの辺り」と言ってコーヒーショップを見つけるのはたいてい光島の方が先だ。私と光島では五感の配分が異なっていて、私は嗅覚の割合が光島よりもずいぶん少ないらしい。

聴覚的なピントの合わせ方もかなり違う。冒頭のジャズは確かに私の耳にも届いていたが、そのときの私は道の先にある視覚的な情報にピントを合わせていたので、音楽は意識にとどまることなく、さらりと後ろに流れていったのである。

10歳ごろ完全に視力を失った光島は、さまざまに特徴的な目印をたよりに街を感じている。人の足音が聞こえるところは歩いても安全な場所であり、昨日までは感じられなかった料理の匂いが、居酒屋新店オープンの情報を光島に伝える。

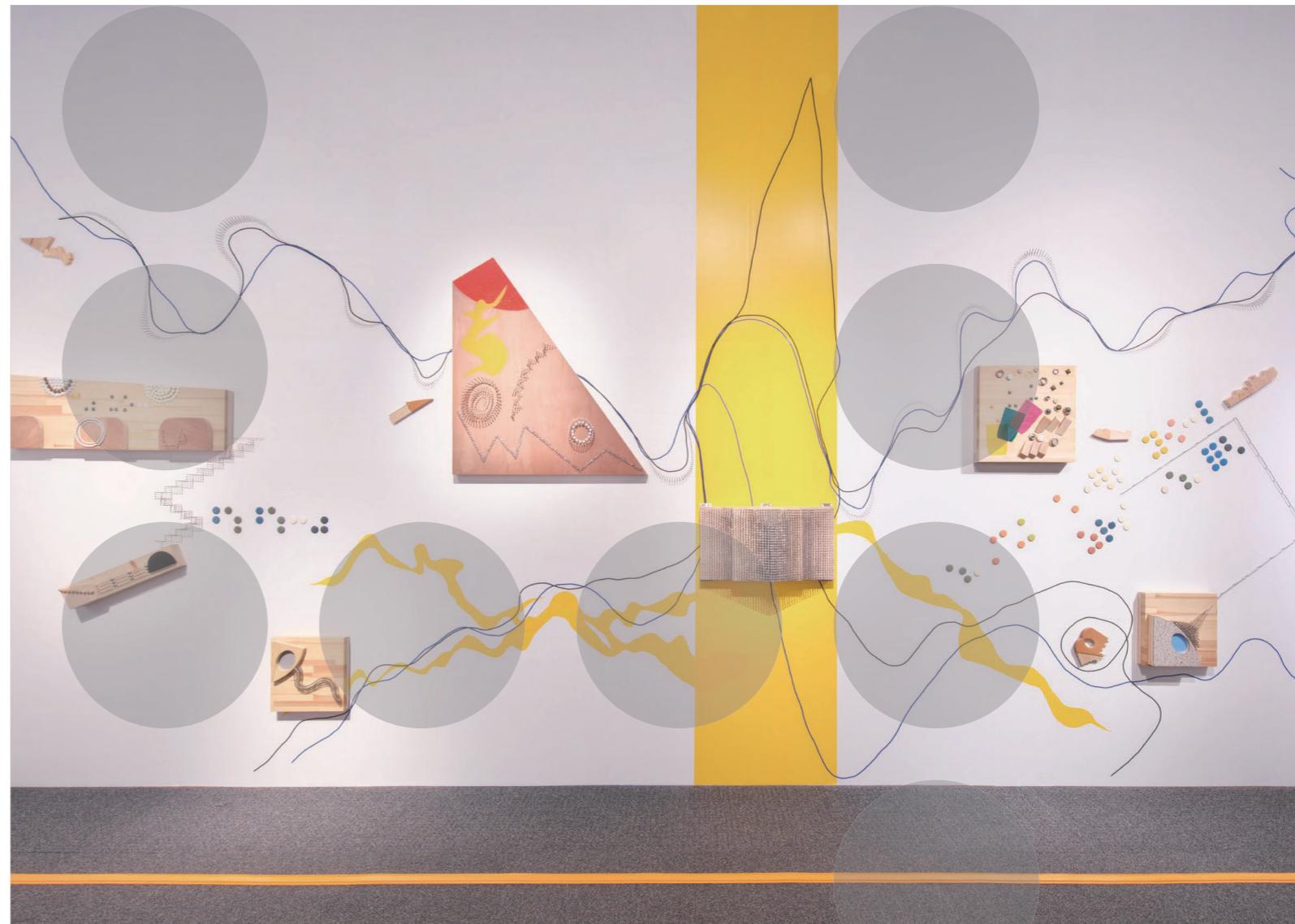
この世界には、見える人、見えにくい人、見えない人がいる。

人間ひとり一人の身体的特性はみな少しずつ異なるがゆえに、見え方をはじめとする感覚の特性やその配分も当然みな異なっている。そう考えたときに私は、「世界の捉え方は人の数だけある」という当たり前のことがやっと腑に落ちた気がする。価値観以前の問題として、そもそも違うのだということが。

光島と街を歩いていると、おもしろいことがたくさんある。思わず吹き出してしまうようなエピソードも、チクリとするような瞬間も、光島と私の間にあるピントのずれが引き起こす新しい経験だ。

こうしたピントのずれは光島と鑑賞者の間にもあって、何かしらの新しい経験が、光島の作品を鑑賞する人の中にも生じるのだらうと思う。一人ひとりのピントのずれ幅が、私とは異なるその人だけの鑑賞体験を生むに違いない。

ギャラリーエークウッドから再び外へ出たら、あの人やこの人のピントの位置を想像してみたい。そこに自分のピントを合わせてみれば、今までぼやけていた場所に小さな光が差しはじめるだろう。異なる角度が作り出す光と影。さまざまな人にとっての街のかたち。新しい光は、あなたが見知っていたはずの街に新しい意味を重ねてくれるはずだ。



エークウッドからひろがるそよぐ まちの風

光島貴之、2024年
協力：竹中大工道具館
制作協力：アトリエみつしま

3

白鳥建二が歩く

白鳥建二さんは、いつも気ままにカメラのシャッターを押しながら歩いていきます。「撮れたものにさほど関心はない」という白鳥さんの写真ですが、東陽町のあの道も、少し違った世界に見えてきます。お酒好きの白鳥さんはいつの間にか、美味しいバーを見つけ一杯。そして、夜の門前仲町に消えるのでした。

プロフィール

白鳥建二

年に数十回は美術館に通う、自他ともに認める「美術館好き」。水戸芸術館「session!」をはじめ、さまざまな美術館で美術鑑賞ワークショップなどのナビゲーターを務める。2005年頃からデジカメで写真を撮り始め、一人で歩くときに撮影するのが習慣のようになっている。酔っばらうとやたらと撮りまくる傾向にあり、これまでに撮影した枚数は45万枚。シャッターボタンを押した時点で、ほとんど完結していて、その後についてはあまり興味がない。



主な展覧会 *は写真家としての出展

- 2014 水戸芸術館現代美術ギャラリー
ジョン・ヨンドゥ「地上の道のように」作品協力
- 2021 はじまりの美術館
「(た)よりあい、(た)よりあう。」*
- 2022 アトリエみつしま企画展「まなざす身体」*
- 2023 さいたま国際芸術祭 2023 *

BOB ho-ho (ボブホーホー)

浜松を拠点に素材を集め、グラフィック、プリンティング、木工など様々な技法を使い展示やワークショップを行う、ウエダトモミ(グラフィックデザイナー)とホシノマサル(摺師)からなるワークショップユニット。主な技法としてシルクスクリーンプリントを用いながらPrintable(可能性のあるプリント)である状態をつくりだす。素材ラプゆえに多方向な視点を持つ。



7月1日の報告

白鳥 建二

今回は、歩く場所の候補をあげてもらって、7月1日の撮影となりました。ドキュメンタリーの撮影と、自分が撮る写真と、両方いっぺんにやっってしまうという日程でした。ほんとは、それぞれ、分けたほうが良かったかな。でも、言い訳をいうと、6月29日まで新潟だったので、展示までのタイムリミットとか、スケジュール調整とかあれこれ。

そして、午後3時過ぎから、とりあえず運河沿いを歩こうと、みなで出発。歩きやすい場所だったので、写真を撮りつつ、すたすた歩く。

「写真の枚数を、ある程度稼ぎたいので、とにかく歩かねば!」

体力勝負の巻き添えになったのは、ドキュメンタリーの撮影チーム。なかなかたいへんだったと思います。そういう時、僕もゆっくり歩いたりしない人なので…。そうして、都営マンションの団地群をうろうろ。

「そろそろ水分補給したいねえ!」と考え始めたころ、アメリカンチックなハンバーガー屋さんに辿り着きます。「1時間くらい歩いたし、休憩してもいいよね」と、ビールを1杯。

ちなみに、ビールは水分補給にはなりませんので、お気を付けくださいね。ハンバーガーも興味引かれたのだが、その後の日程を考えて、ピクルスとポテトフライを注文。

ドキュメンタリーのインタビュー撮影を挟んで、次は、門前仲町へ。飲食店の並ぶエリアを、てくてく歩く。料理の匂いとか、お店のにぎわいなんか聴こえると、何だかわくわくしてくるよね。新潟で飲み歩きしていたのもあって、すぐにでも飲みたいのだが、そこをおさえて、できるだけあちこち行ってみる。

この日は結構蒸し暑かったので、さすがにふらふら、ぼーっとしてきて、そろそろ限界かなと思ったのが、だいたい1時間くらい歩いたあたりかな。そこから、入るべきお店の選択。「どこでも良い」ってわけでもないんだよね。そうして、辿り着いたお店で、ワインを3杯だったかな。「ああ!落ち着いたあ!!」本日の役割は、とりあえず果たしたことにしよう!その後、立ち飲みのお店で、ワインを2杯かな。結局、飲み歩きの撮影日でした。

3軒行ってるしね。





夕浜運河沿いを歩く光島



門前仲町駅前を歩く白鳥 (左)

社会のダイバーシティを考える

6つの点から広がる世界

点字にふれる

2024年7月26日(金) - 2024年10月24日(木)

休館日:
日曜・祝日、8月10日(土) - 8月18日(日)、10月5日(土)

開館時間:
10:00 - 18:00 (土曜・最終日は17時まで)
10月2日(水)は20:30まで夜間開館

主催:
公益財団法人 ギャラリー エークウッド
岡部三知代 / 徳平 京 / 深澤悠里亜 / 風當嘉津美 / 西田千秋
石井康友 / 真鍋頼子 / 北原英雄

特別協力:
社会福祉法人 日本点字図書館

協力:
日本点字図書館附属池田輝子記念ふれる博物館、手と目でみる教材ライブラリー、錦城護謨株式会社、公益財団法人 竹中大工道具館、長谷木記念幹、てんやく絵本ふれあい文庫、点字つき絵本の出版と普及を考える会、やさきさとみ、株式会社くもん出版、点字毎日、PLAYWORKS株式会社、株式会社フェリシモ、株式会社マリモ、日本郵便株式会社、日本障害者卓球連盟、一般社団法人 日本ゴールボール協会、公益財団法人 共用品推進機構、点字楽譜利用連絡会、一般社団法人落語ユニバーサルデザイン化推進協会

編集 / 発行:
公益財団法人 ギャラリー エークウッド

翻訳:
Ted Richards

会場写真、P18・19:
光齋昇馬

デザイン:
松尾由佳 (Nica)

映像制作:
森内康博、田村大 (らくだスタジオ)

アドバイザー:
酒井忠康 (元世田谷美術館館長)
木下直之 (静岡県立美術館館長)
和氣雅子 (株式会社 AWP 代表)

関連イベント

光島貴之による滞在制作
日 時: 2024年7月26日(金) 10:00 ~ 18:00
2024年7月27日(土) 10:00 ~ 15:00
制作協力: アトリエみつしま

ワークショップ「点字で自分の名刺をつくろう」
日 時: 2024年8月3日(土)
場 所: ギャラリーエークウッド
講 師: 社会福祉法人日本点字図書館 スタッフ

上映会+トークショー 映画「目の見えない白鳥さん、アートを見に行く」
日 時: 2024年9月28日(土) 10:30 ~ 13:00
場 所: 東陽町ぐりんたす 2階ホール (東京都江東区南砂 2-5-14)
講 師: 三好大輔 (「目の見えない白鳥さん、アートを見に行く」監督)

トークショー「見えなくなっても、絵本を読みたい!」点字つきさわる絵本ができるまで
日 時: 2024年10月2日(水) 18:30 ~ 20:00
場 所: 東陽町ぐりんたす 2階ホール (東京都江東区南砂 2-5-14)
講 師: 岩田美津子 (てんやく絵本ふれあい文庫代表) 聞き手: 関谷裕子 (元こくま社編集長)

©2024 GALLERY A⁴ 本書の一部または全部を複製、転載することを禁じます。



ギャラリーエークウッド
公式ホームページ
<https://www.a-quad.jp/>